

カキ「太秋」の施設栽培について

食味の優れた「太秋」は施設化することにより早熟化することに加えて、汚損果も軽減され商品性が高まる。しかし、一方で施設特有の奇形果の発生や結実が不安定になるなどの問題も残されている。

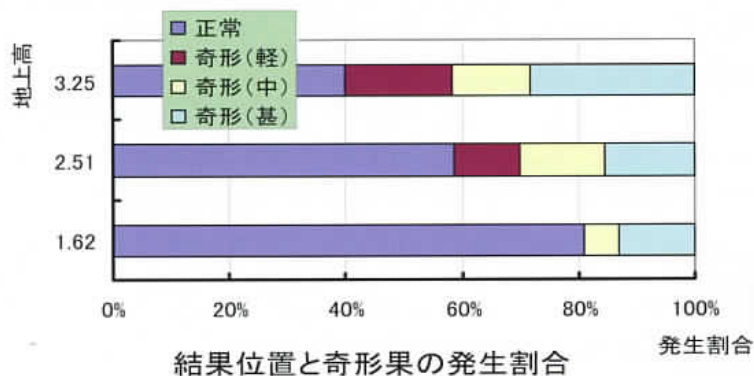
鬼北分場分場では平成9年度から、新商材として可能性の高い「太秋」の長期出荷をめざした施設栽培技術の確立を図った。

休眠要求量(時間)の確保と燃料費の節約のため2月中・下旬を中心に加温を開始した作型では、「太秋」の早熟化は、加温開始から発芽、開花までの日数に左右され、開花後から収穫までの日数は160日程度で露地と差がない。

収穫は着色前から可能であり、長期間の出荷が可能であるが、着色前の果実品質(Brix)はやや劣る。

太秋の果実品質

年次	作型	発芽日	開花期		収穫日	生育日数 ①-②	果重	チャート		汚損	硬度	Brix
			①	②				赤道部	条紋			
2002	加温(2/22)	3/12	4/17	9/24	156	208	2.4	0.2	0.0	2.72	16.4	
	露地	3/27	5/12	9/24	152	254	2.8	0.2	0.0	2.77	15.5	
				10/11	314	4.6	2.4	0.6	2.45	15.7		
2003	加温(3/3)	3/ 8	4/17	8/11	134	195	2.4	0.3	0.0	2.83	13.0	
				9/10	-	2.6	0.5	0.6	2.91	14.6		
				9/19	265	2.6	1.5	0.1	2.68	15.9		
	露地	3/23	5/13	10/24	162	298	5.4	2.9	1.0	2.65	18.9	
2004	加温(2/23)	3/17	4/14	9/ 8	152	-	2.7	1.2	0.2	2.55	14.3	
	無加温			9/24		284	2.8	1.6	0.1	2.64	14.9	
				10/26	165	2.86	2.5	0.7	2.44	16.8		
	UV遅延	4/ 5	5/14	11/ 8	178	284	4.5	0.0	0.2	2.58	17.4	



生理落果は少なく、受粉も必要ないので、10a当たり植栽本数100本程度(占有面積8.5㎡)での栽培で、1㎡当たり6本程度の結果母枝の配置により、4t以上の収量が確保できる。

加温開始から結実期までの温度が高い(25℃以上)と奇形果の発生が見られる。また、あまり強勢な結果枝では奇形果が多く発生しやすい。

奇形果の発生を軽減するには、平棚仕立等により、ハウス中～下部での結実位置を保ちながら、結果母枝の誘引等により発生する結果枝を落ち着かせるとよい。

なお、紫外線カットフィルムの屋根掛け栽培での熟期遅延効果は認められるが、経済的な効果は今のところ薄い。

(鬼北分場 主任研究員 森口一志)

編集発行

愛媛県立果樹試験場

〒791-0112 松山市下伊台町 1618 TEL089-977-2100 FAX089-977-2451